

1. (1) $\mathbf{u} = (-3, -1, 2)$.

(2) $|x| = |y| = |z|$ をみたすすべての $\mathbf{u} = (x, y, z)$.

(3) $\mathbf{u} = \left(-\frac{1}{2}, -\frac{1}{2}, -\frac{1}{2}\right)$.

(4) $\operatorname{div}(\operatorname{rot}\mathbf{U}) = 0$.

(5) 対偶を示す. C^∞ 級関数 $g: \mathbb{R}^3 \rightarrow \mathbb{R}$ により $\mathbf{V} = \operatorname{grad}(g) = (\partial_x g, \partial_y g, \partial_z g)$ と表されるとすると, g に関しては偏微分の順序交換が可能だから

$$\operatorname{rot}(\operatorname{grad}(g)) = \begin{pmatrix} \partial_y(\partial_z g) - \partial_z(\partial_y g) \\ \partial_z(\partial_x g) - \partial_x(\partial_z g) \\ \partial_x(\partial_y g) - \partial_y(\partial_x g) \end{pmatrix} = \mathbf{0}.$$

2. (1) S の $z = k$ での切り口は

$$\{(x, k, z) \mid x^2 - k^2 + z^2 - 4x + 8k - 2z - 12 = 0\} = \{(x, k, z) \mid (x-2)^2 + (z-1)^2 = (k-4)^2 + 1\}.$$

これは平面 $y = k$ 上の $(2, k, 1)$ を中心とする半径 $\sqrt{(k-4)^2 + 1}$ の円である. その半径は $k = 4$ のとき最小値 1 を取る.(2) (1) より $S \neq \emptyset$. $\operatorname{grad}(f)(\mathbf{u}) = 2(x-2, -y+4, z-1)$ である. これが $\mathbf{0}$ となるのは $\mathbf{u} = (2, 4, 1)$ のときのみだが, $f(2, 4, 1) = 1$ だから $(2, 4, 1) \notin S$ であり, 従って S 上 $\operatorname{grad}(f) \neq \mathbf{0}$. よって S は曲面である.

(3) $\mathbf{n}(\mathbf{u}) = -\frac{(x-2, -y+4, z-1)}{\sqrt{(x-2)^2 + (y-4)^2 + (z-1)^2}}$.

(4) $(a-2)x + (4-b)y + (c-1)z = 0$.

(5) $\mathbf{w} = (a, b, c) \in S$ とし, $(2, -2, 1) \in T_{\mathbf{w}}S$ とする. $T_{\mathbf{w}}S = \langle \operatorname{grad}(f)(\mathbf{w}) \rangle$ だから, $k(2, -2, 1) = (a-2, -b+4, c-1)$ をみたす $k \in \mathbb{R}$ が存在する. $\mathbf{w} \in S$ より $(a-2)^2 - (b-4)^2 + (c-1)^2 = 1$ だから $4k^2 - 4k^2 + k^2 = 1$, よって $k = \pm 1$. 従って $\mathbf{w} = (4, 6, 2)$ または $(0, 2, 0)$.3. (1) $f(\mathbf{u}) := 100x^2 + 121y^2 + 144z^2 - 1$ とおくと $E = f^{-1}(0)$. まず $f\left(\frac{1}{10}, 0, 0\right) = 0$ より $E \neq \emptyset$. また $\operatorname{grad}(f)(\mathbf{u}) = 2(100x, 121y, 144z)$ が $\mathbf{0}$ になるのは $\mathbf{u} = \mathbf{0}$ のときのみだが, $f(\mathbf{0}) = -1 \neq 0$ だから $\mathbf{0} \notin E$ であり, 従って E 上 $\operatorname{grad}(f) \neq \mathbf{0}$. よって E は曲面である.

(2) $\operatorname{div}\mathbf{V} = 0$.

(3) $S^2 := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^3 \mid |\mathbf{u}| = 1\}$ とおき, S^2 の向きを $\mathbf{n}(1, 0, 0) = (1, 0, 0)$ となる $\mathbf{n}: S^2 \rightarrow \mathbb{R}^3$ で定める. S^2 と E で囲まれる領域を Ω とおくと $\partial\Omega = E \cup S^2$. \mathbf{n} と \mathbf{n}_E はともに Ω から外側に向かう法ベクトルで (図 1 参照), \mathbf{V} は Ω を含む領域上で定義されるから, Gauss の発散定理と (2) から

$$\int_E \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} dS + \int_{S^2} \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} dS = 0.$$

これと S^2 上 $\mathbf{V}(x, y, z) = (x, y, z)$ であることから, \mathbb{R}^3 上のベクトル場 $\mathbf{W}(x, y, z) := (x, y, z)$ に対し

$$\int_E \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} dS = - \int_{S^2} \mathbf{W} \cdot \mathbf{n} dS.$$

 $D^3 := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^3 \mid |\mathbf{u}| \leq 1\}$ とおけば $\partial D^3 = S^2$ で, \mathbf{n} は D^3 から外側に向かう法ベクトルであり, \mathbf{W} は D^3 を含む領域上で定義されるから, Gauss の発散定理より

$$\int_E \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} dS = - \int_{S^2} \mathbf{W} \cdot \mathbf{n} dS = - \int_{D^3} \operatorname{div}\mathbf{W} dx dy dz = -3 \int_{D^3} dx dy dz = -3(D^3 \text{ の体積}) = -4\pi.$$

4. (1) $\operatorname{div}\mathbf{V} = -\frac{6xy}{(x^2 + 4y^2)^2}$, $\operatorname{rot}\mathbf{V} = \mathbf{0}$.

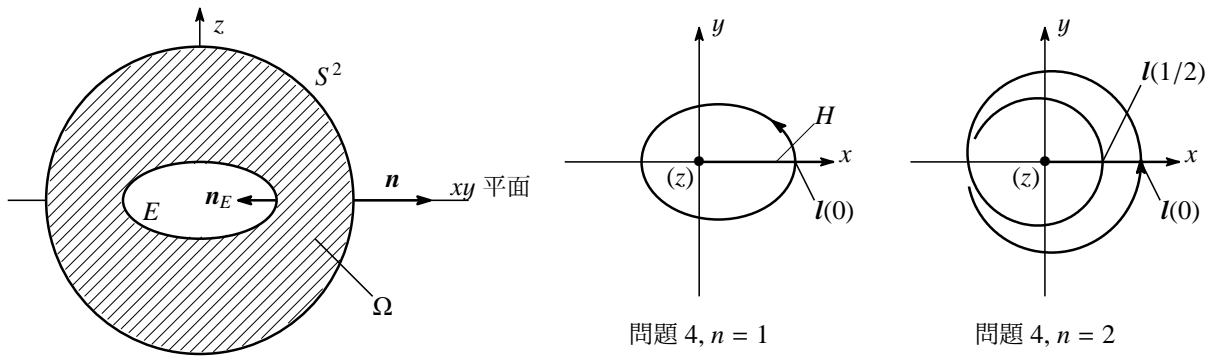


図1 問題3,4の図

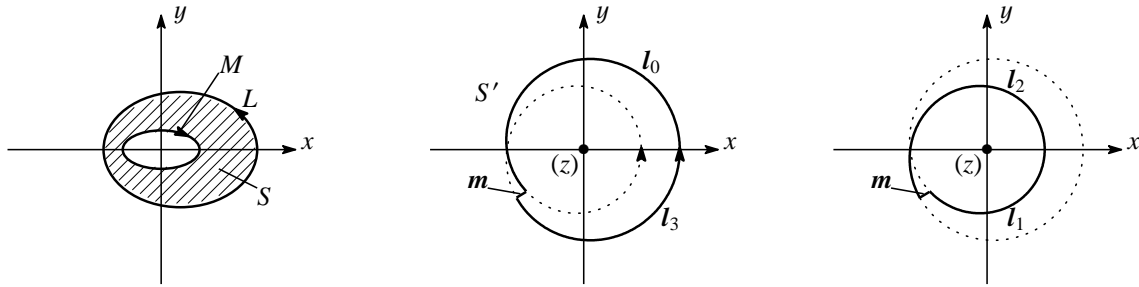


図2 問題4(2),(3)

(2) $n = 1$ のとき, 条件から L はおおむね図1のようになり, 十分小さい $\epsilon > 0$ を取り $\mathbf{m}(t) := \epsilon(2 \cos(-t), \sin(-t), 0)$ で表される閉曲線を M とすれば, 向きも込めて $\partial S = L \cup M$ となる Ω 内の向きづけ可能コンパクト曲面 S を取れる (図2を参照せよ). Stokes の定理と (1) より

$$\int_l \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} = - \int_m \mathbf{V} \cdot d\mathbf{m} = - \int_0^{2\pi} \frac{1}{4\epsilon^2(\cos^2 t + \sin^2 t)} \begin{pmatrix} \epsilon \sin t \\ 2\epsilon \cos t \\ 0 \end{pmatrix} \cdot \epsilon \begin{pmatrix} -2 \sin t \\ -\cos t \\ 0 \end{pmatrix} dt = \pi.$$

(3) (図2を参照せよ) $k = 0, 1, 2, 3$ に対し, $l_k := l_{[k/4, (k+1)/4]}$ とおく. また $l(1/4)$ から $l(3/4)$ に向かう曲線を考え, そのパラメータ m を取る. l_0, m, l_3 をつないでできる曲線に対し (2) を適用すると

$$\int_{l_0} \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}_0 + \int_m \mathbf{V} \cdot d\mathbf{m} + \int_{l_3} \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}_3 = \pi. \quad (*)$$

l_1, m, l_2 に沿った積分も, m の向きに注意して同様に考えると,

$$\int_{l_1} \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}_1 - \int_m \mathbf{V} \cdot d\mathbf{m} + \int_{l_2} \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}_2 = \pi. \quad (**)$$

(*), (**) より

$$\int_l \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l} = \sum_{k=0}^3 \int_{l_k} \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}_k = 2\pi.$$

補足.

- (1)~(3) はそれぞれ $\operatorname{div} \mathbf{V} = (x+3)^2 + (y+1)^2 + (z-2)^2$, $\operatorname{rot} \mathbf{W} = 3(y^2 - z^2, z^2 - x^2, x^2 - y^2)$, $\operatorname{grad}(f) = (y+z+1, z+x+1, x+y+1)$ であることを使う. (4) はまともに計算してはダメで, 一般に \mathbf{U} が C^∞ 級なら $\operatorname{div}(\operatorname{rot} \mathbf{U}) = 0$ であることを自分で確かめてあれば容易 (演習 13, 14 参照). 中間試験を復習した人にとって (5) はやりやすかったはず.
- S は「 y 軸に平行」な一葉双曲面の一部. 平面 $y = k$ で切ると常に円が現れる (演習 14 参照). (2)~(5) は演習 12, 問題 2 (2) や演習 14, 問題 2 (3), レポート 9, 10 などと同様.
- 演習 12 の問題 2, あるいは教科書の例題 2.29 と同様の問題. E は楕円を軸のまわりに回転して得られる曲面で, 座標軸との交点は $(\pm 1/10, 0, 0)$, $(0, \pm 1/11, 0)$, $(0, 0, \pm 1/12)$ である. \mathbf{V} が $\mathbf{0}$ で定義されていないので, 「 $\operatorname{div} \mathbf{V} = 0$

だから Gauss の発散定理より $\int_E \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} dS = \int_{\Omega} 0 dx dy dz = 0$ というのは誤り。解答例の Ω 上では \mathbf{V} が定義されるから Gauss の発散定理を使える。

解答例で \mathbf{V} の積分を \mathbf{W} に置き換えているところについて少し詳しく見ておく。 S^2 の局所座標 $\varphi: U \rightarrow S^2$ に対し、 $A := \varphi(U) \subset S^2$ とおくと

$$\int_A \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} dS = \int_U \mathbf{V}(\varphi(s, t)) \cdot \hat{\mathbf{n}}(s, t) ds dt \quad (*)$$

だが、 $\varphi(s, t) \in S^2$ だから $|\varphi(s, t)| = 1$ で、従って \mathbf{V}, \mathbf{W} の定義から

$$\mathbf{V}(\varphi(s, t)) = \frac{\varphi(s, t)}{\sqrt{|\varphi(s, t)|^3}} = \varphi(s, t) = \mathbf{W}(\varphi(s, t))$$

である。よって \mathbf{V} を \mathbf{W} に置き換えても (*) の値は変わらない。 S^2 上での積分とは、このように局所座標上で積分した値を足し合わせたものだから、 S^2 上での \mathbf{V} と \mathbf{W} の積分は等しいことがわかる。

より一般に、向きづけ可能な曲面 S 上で $\mathbf{V} = \mathbf{W}$ である限り (他の点で $\mathbf{V} \neq \mathbf{W}$ であっても)、 $\int_S \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} dS = \int_S \mathbf{W} \cdot \mathbf{n} dS$ であることもわかる。

4. 中間試験の問題 4 と本質的に同じ問題である。問題文や解答例の計算方法を見比べよ。解答例と同様に考えると、 \mathbf{l} が y 軸の正の方向に向かって H を k 回横切り、 y 軸の負の方向に向かって H を l 回横切るとき、積分値は $(k-l)\pi$ であることもわかる。つまり \mathbf{V} の積分は、曲線が x 軸のまわりを「何周したか」を測る機能を持っている。
- (2) の $\epsilon > 0$ については、 $r(t)$ の最小値より小さい値を取れば十分。 \mathbf{l} の周期が 1 であることから r も $r(t+1) = r(t)$ をみたす周期的な関数で、従って $0 \leq t \leq 1$ 上での最小値を考えれば (それは存在し正である)、その値が \mathbb{R} 上での最小値にもなる。

配点 : 15, 15, 12, 8 (1: $3 \times 5 = 15$, 2: $3 \times 5 = 15$, 3: $4 + 3 + 5 = 12$, 4: $2 + 3 + 3 = 8$)